様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０２４５

研究課題名（和文）地方青年結社における「文」の実践に関する社会史研究

研究課題名（英文）Social history study of writings in a local youth association

研究代表者
木戸　雄一（KIDO, Yuichi）

大妻女子大学・文学部・准教授

研究者番号：３０３９０５８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、1900年前後の地方青年の文学を、多様な社会的実践として理解することを目的とする。概要は①地方青年の文章の内容の分析、②文章による青年同士のコミュニケーションの分析、③地方青年の文学を出版した出版社の分析である。
　本研究の成果として、①福島県の文章回覧誌を翻刻した。②文語体書簡文が生成する青年たちのホモソーシャルな関係を明らかにした論文を発表した。

研究成果の概要（英文）：This study aims to understand the literature of local youths around 1900 as various social practices.
The outline is as follows: (1) Analyze the contents of sentences of local youth. (2) Analyze communication between young people by sentences. (3) Analyze the publisher who published the literature of local youth.
As a result of this study (1) reprinted texts circulated magazine of Fukushima Prefecture. (2) announced the paper revealed a homosocial relationships of young people generated by the literary body letter sentences.

研究分野：近・現代文学

キーワード：国文学　近・現代文学　コミュニケーション　出版　地方史

１．研究開始当初の背景

啓蒙期以降の地方における「文」をめぐる実践（演説・教育・文章会・地方新聞雑誌の論説・方言矯正など）と、いわゆる文芸活動（俳諧・短歌・漢詩・川柳・地方新聞雑誌掲載の小説など）とは、従来切り離されて論じられてきた。また、地方文学青年の動向を研究する素材としてとりあげられてきた中央文壇の著名な投稿雑誌は、東京を中心とした都市部での「文」の担い手の分業化に応じてジャンルが細分化されており、投稿する文学青年のテクストを中央文壇の眼差しで分節化し、またそれへの従属と専門化を文学青年達にうながすものであった。

しかし、地方における俳諧・短歌・漢詩を中心とした文芸活動は地方の名望家層が中心となって組織運営されており、名望家層は同時に地方の啓蒙に執心し、新聞・雑誌の創刊や演説会の開催に関わっていた。また、正岡子規はそのような名望家層によって担われた俳諧を「月並」と批判したが、彼が松山で主催していた回覧雑誌に掲載された「文」は様々なジャンルに及ぶとともに、それらのジャンルに分類不可能な「文」も含まれていた。

文学研究においては、地方における「文」の多様な実践は、地方における「文」の担い手の少なさと、それに伴う中央との文化的格差に還元されてきた。地方における回覧雑誌での活動などもそのような視座を反映し、アマチュア時代の秀作としてのみ位置づけられてきた。

２．研究の目的

本研究は、1880 年代から 90 年代の地方青年結社とそこで行われていた「文」をめぐる社会的実践を検討することで、1900 年前後に顕著となる「文学青年」の発生とその活動を、個人の内向した営為としてではなく、社会化された行為として再検討することを目的とする。

1870 年代から全国的に広がったさまざまな機関や集団による啓蒙の試みは、話し言葉書き言葉の変革をともなっていた。1890 年代には『国民之友』『日本人』などの中央の青年結社に触発されて、多くの青年結社が地方に生まれ、回覧雑誌・公刊雑誌の発行や、演説会討論会などの言語活動が行われた。1900 年代には、中央の投稿雑誌に向けて地方から多くの文学青年が投稿し、文芸を生産・享受する層を形作っていった。

地方の青年結社の雑誌を見ると、論説をはじめさまざまなジャンルが掲載され、書き手もそれぞれのジャンルにまたがって執筆している。また、教育的・政治的な効用を期した小説や、啓蒙的な情報を新体詩にしたものなど、ジャンルと内容の結びつきは、文芸に関する今日の通念とは異なっている。論説文も単に黙読するためではなく音読にすぐれた文章であることが目指されていた。これらのテクストは和文脈・漢文脈・欧文脈を交差させながら、新たな文章の形式と内容を生み出しつつあり、その総体をここでは「文」と仮に名付けておく。

「文」を「書く」「読む」という実践は地方の啓蒙と切り離せないものであり、すぐれて社会的な活動であったとともに、またそれを実践すること自体が青年を引きつけていた。地方青年の「文」をめぐる多様な実践から文芸活動を切り離して検討するのではなく、むしろ文芸を政治・教育・社会改良などをめぐる多様な社会的活動としての「文」の実践のひとつと認識し直すことで、1880 年代から 90 年代の地方の言語活動と 1900 年代の「文学青年」を接続し、一貫して考察することができる。

３．研究の方法

(1)地方青年結社が刊行した雑誌の「文」の検討と、「文」を介した結社の成員および結社間のコミュニケーションの具体的検討。地方青年層の「文」をめぐる具体的活動に研究の照準を合わせることで、従来は中央の文壇を下支えし、中央文壇による選別の対象としてのみ認識されていた地方青年結社の「文」の実践を、地方の新聞や政治集団、階層や地域の地理的文化的特殊事情などとの関連でとらえ、中央の価値観とは異なる「文」の実践と、その効用を分析することができる。

(2)1890 年代後半から 1900 年代に創業する文学結社を基盤とした群小出版社の調査。1900 年代には「文学同志会」のような、地方文学青年の互助組織であるとともに、ジャンル横断的な文芸的出版物を刊行する群小出版社が続出した。このような群小出版社はほとんど研究されていない。文学青年層が生産する「文」を収載することを出版の戦略とするこのような群小出版社と、地方における「文」の実践とを関連づけて考察することによって、1900 年代以降の文壇を支えた文学青年層が、文壇的な文芸を超えた広範な「文」の実践をその基盤にしていることを明らかにできる。

この研究によって、地方青年結社における「文」の実践という観点から「文学青年」の活動をとらえ直すことができるとともに、文学研究から疎外されていた中央の群小出版社や通俗文芸書、地方の青年雑誌および言語活動を考察するための理論的・資料的基盤をつくることができる。また、本研究は、地方に広範な支持を得た大正昭和期の講談社文化や、昭和期の地方における危機意識とファシズムの台頭を、地方における「文」の実践として分析するための新たな理論的・資料的基盤につながる。

以上の全体構想をふまえ、本研究では（１）の研究を 1890 年代から 1910 年代頃までを中心に進めることで、地方における「文学青年」の言語的実践を多角的にとらえ、その内容と関連する限りにおいて（２）の研究も進める。

４．研究成果

(1)地方文学青年の研究でよく言及される小木曽旭晃『地方文芸史』に掲載された文学雑誌・文学結社・文学者のデータベースを作成し、さらに文学結社の枠を超えた青年結社の交流が見られる『日本青年』掲載の青年結社リストの作成を行った。この基礎作業によって、当時の地方青年結社の大まかな把握をこころみた。しかし(2)で実践した各地方の資料調査によって、これらに掲載された青年結社が全体のごく一部に過ぎず、また交流の度合いによる偏りがあることが明らかになった。

(2) 各地の資料を調査した。明治新聞雑誌文庫（『同楽』『文海』『黄薇余芳』『文明之児童』『をしゑ』『風流之友』『松浪草紙』『無逸』『総房』)、岡山県立図書館（『白虹』『血汐』『星光』『筆戦誌』『文華』『進歩』)、鳥取県立図書館（『いなか雑誌』『英華集』『山陰之公論』『新天地』『切偲文藻』『朝日影』『文園之友』『文教』『我等』『今日話』『第二今日話』『第二知恵競』『講談倶楽部』)、尾鷲市中央公民館郷土室中村山土井家文庫（『斯友』『政海之潮』『地方之指針』『俳諧友雅新報』）等を調査したが、特に以下の地域で有望な資料を得た。

①八戸市立図書館所蔵の八戸青年会関係を中心とした回覧雑誌（『蛍雪の友』『丈余の雪』『図南雑誌』『国士』『真男子』）および日誌等の関連資料、他団体の回覧雑誌（『星光』『奥南青少年』『奥乃華』）の調査。地域の青年教育を担っていた八戸青年会の中に複数の回覧雑誌や少部数で印刷刊行された雑誌があり、複数のグループが活動していたことがわかった。さらにその文章は複数のジャンルにわたり、内容は青年同士のホモソーシャルな交友を時に過剰に惹起するものであった。ここには中央の投稿雑誌などでは見出すことのできない濃密な交友関係とその文章化の事例が見られた。一方、八戸青年会以外の回覧誌では中学校程度の文章修行を目的とした回覧誌と、東京に遊学した経験のある書き手の回覧誌であった。八戸青年会のものとは内容に大きな違いがあり、地域の青年結社と学校教育の言語活動の差異が浮き彫りになった。

②1900 年頃に現在の福島県喜多方市で活動していた「作文会」、およびその後身である「文学攻究会」資料の調査と翻刻を行った。「作文会」は 1898 年 8 月に発足した。当時、耶麻郡立平林尋常小学校の准教員であった風間悌三と菊池研介によって事務が執り行われ、会員資格は高等小学校卒業以上、耶麻郡関柴村（現喜多方市）近在の青年達が主要な会員であった。回覧誌『文の友』、『文の千草』を発行し、1902 年 1 月に会名を「文学攻究会」と改め、回覧誌も『深山の花』と改題した。1904 年 2 月、日露戦争で休会し、風間が戦死したこともあってそのまま会は消滅した。上記の資料には多数の回覧誌とともに、会の運営記録が多く含まれており、文章修行を目的とした地方の青年結社がどのような活動をしていたかを具体的に知ることができる資料である。検討の結果、地方の高等小学校卒業者が地域を担う人材となる過程で、さまざまな文章修行を行っていることが明らかになった。和歌・俳諧・漢詩といった旧来の文学ジャンルのほかに、小説・日記・書簡・紀行文が書かれていた。また、同人間での批評の応酬からは、各自の文章に対する規範意識を読み取ることができる。蔵書家でもあった菊池研介は旧派の和歌教育を受けた人物であり、新派の和歌に対する激しい批判を行い、同人の和歌の傾向を導いていた。田山花袋『田舎教師』にあるような新派和歌志向とは正反対の状況が同人のリテラシーの不均衡の中で生まれており、当時の地方文学青年結社の多様性の一例である。また、同人がしばしば徴兵され入営していたが、入営先から軍隊生活を綴った文章が投稿され掲載されていた。入営は同人拡大の機会でもあった。喜多方からかなり離れた奥会津地方在住の同人が、入営中に勧誘を受け入会している。その際の会誌の回覧は郵便によってなされていた。会の中心人物である菊池は、会津郷土史研究の草分けとなり、小学校教員や在郷軍人会分会長をつとめるとともに、私設の文庫も地域に公開していた。高等小学校卒業者による熱心な文章修行と文学活動をつぶさに分析することによって、中学校進学者を中心とした中等教育の普及による文学青年の族生という観点だけでは見落としてしまう、地域独自の「文」の発展と地域的なリテラシー形成を理解することができた。これらの資料は本研究に関わる重要な資料であると同時に肉筆資料であることを鑑み、翻刻を行った。そのうち、回覧誌の一部である『愛堇遺稿』上下（福島県立図書館蔵）の翻刻を発表した。

(3)青年の交際に必要な基本的リテラシーである書簡文についての研究をまとめた。京都の文章投稿雑誌『交誼之魁』と雑誌交換を行い交流があった青年雑誌の調査を行い、地方青年の交際を前面に掲げる投稿文章雑誌について考察した。また、硯友社周辺の雑誌である『詞海』と交流があった『東洋文学』と、さらに『東洋文学』と交流があった雑誌の調査を行い、硯友社のような非政治的結社と見なされる中央の文学結社と、地方で文学および社会活動をしている青年結社との関連について考察した。その過程で 1890 年代の青年層による文語体書簡文について調査研究を進めた。文語体書簡文は、一つの書簡の中で多様な文体に移行しうる流動的な文体であり、その自在な文体変化を快楽として共有できるリテラシーが当時の青年間の友情を生成する条件であることを明らかにした。その成果を、国木田独歩の小説「おとづれ」を題材にして考察した論文「「青年」の

連帯の失効―国木田独歩「おとづれ」と「青年」の手紙―」(『大妻国文』第 48 号、平成 29 年 3 月）として発表した。

(4) 1890 年代後半から 1900 年代に創業する文学結社を基盤とした群小出版社の調査として、地方文学青年の互助組織として出版活動を行った「文学同志会」出版書の調査と収集を行った。名古屋大学および尾鷲市中央公民館郷土室中村山土井家文庫で、同会の機関誌『文章世界』の調査を行った。「文学同志会」刊行書のリストを作成し、内容および執筆者に関する情報を蓄積することができた。刊行書のジャンルは多岐にわたっているが、文語文を基盤とした定型文の組み合わせに、定義の曖昧な観念語が交じる文体はほぼ共通していた。地方の文章修行と文章観のありようと関連する内容及び文体であることが想定された。「文学同志会」刊行図書執筆者の追跡調査では、小林紫軒のように、さまざまな雑文を書く「記者」として活動を続けた者が確認できた。これは、地方文学青年の文章修行のジャンル横断性が、上京後「記者」として文筆活動を展開していく基盤となっている可能性を示唆している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①木戸雄一、明治期地方文学資料の翻刻と解題（二）―福島県喜多方市「文学攻究会」資料・『愛堇遺稿』下―、大妻女子大学紀要―文系―、査読無、49 号、2017 年、pp. 103-176
②木戸雄一、「青年」の連帯の失効―国木田独歩「おとづれ」と「青年」の手紙―、大妻国文、査読無、48 号、2017 年、pp. 89-111
③木戸雄一、明治期地方文学資料の翻刻と解題（一）―福島県喜多方市「文学攻究会」資料・『愛堇遺稿』上―、大妻女子大学紀要―文系―、査読無、48 号、2016 年、pp. 93-139

６．研究組織
(1)研究代表者
木戸　雄一（KIDO, Yuichi）
大妻女子大学・文学部・准教授
研究者番号：３０３９０５８７